

# よみがえる台湾語映画の世界 特集上映

2021年10月15日[金]～17日[日] 国立映画アーカイブ 小ホール(東京都中央区京橋3-7-6)

全作品 日本語字幕付き ☆印執筆 | 韓 燕麗(HAN Yanli) 写真提供 | 台湾映画・メディア文化センター

12時00分 『モーレツ花嫁 気弱な婿さん』(三八新娘憨子婿) 1967年 / 101分



監督 | 辛奇 脚本 | 陳小皮 撮影 | 陳忠信  
出演 | 金玫、石軍、金塗、楊月帆

強い女性と弱い男性のカップルによる爆笑コメディ。美青年の家の外で群れる女性たち、結婚前の同棲を提案するヒロイン、そしてエンディングで結婚相手の家に嫁いで行く老父など、笑いの中にも伝統的な家父長制の秩序を転覆させるような設定もあって驚かされる。☆

16時00分 『地獄から来た花嫁』(地獄新娘) 1965年 / 117分



監督 | 辛奇 脚本 | 張淵福 撮影 | 洪慶雲・林贊庭  
出演 | 金玫、柯俊雄、柳青、歐威、戴佩珊

エリナー・ヒバートの小説『琥珀色の瞳の家庭教師』(Mistress of Mellyn) (1960) を映画化したもの。殺人事件や幽霊などミスティックな要素が満載のホラー映画だが、当時まだ7歳の子役だった戴佩珊の演技力も見どころの一つ。父親が映画プロデューサーだった彼女は4歳から映画に出演し、今回の上映作では4年後の『チマキ売り』で主役を演じている。☆

12時00分 『夫の秘密』(丈夫的秘密) 1960年 / 100分



監督 | 林搏秋 脚本 | 陳舟 撮影 | 陳正芳  
出演 | 張美瑤、張潘陽、吳麗芬

竹田敏彦の小説『涙の責任』(1939) と松竹の同名映画(1940) をベースにした作品。ヒロインを演じた張美瑤はのちに台湾と東宝の合作『香港の白い薔薇』(1965) にも出演した。公開当時はそれほどヒットしなかったが、2002年に香港映画評論学会が「華語映画ベスト200」の一本として選出し、再評価の機運が高まっている。☆

16時00分 『五月十三日 悲しき夜』(五月十三傷心夜) 1965年 / 97分



監督 | 林搏秋 脚本 | 洪信徳(劍龍)・林翼雲(林搏秋) 撮影 | 林鴻鐘  
出演 | 張清清、陳雲卿、張潘陽

姉妹が同じ男性に恋心を抱くという常套的なストーリーだが完成度が高く大ヒットした作品。5月13日の大稻埕(台北の西部にある古い市街地)における祭りの盛況を映像に記録したことで知られるが、中盤で「反攻大陸」(大陸に反撃せよ)のセリフが出るなど、この時代の記録としても興味深い。☆

12時00分 『危険な青春』(危險的青春) 1969年 / 95分



監督 | 辛奇 脚本 | 辛金傳(辛奇)・張宏基 撮影 | 廖慶松  
出演 | 石英、鄭小芬、高幸枝

風俗産業の実態や売春の斡旋など道徳が崩壊した社会の暗黒面を暴いた作品。青少年に対する教訓的メッセージをラストに出してはいるが、同時期の台湾で作られていたいわゆる「健康写実主義」の北京語映画とは正反対の趣になっている。のちに台湾ニューウェイブの侯孝賢監督とコンビを組むことになる編集の名手・廖慶松が本作と『チマキ売り』では撮影を担当している。☆

16時00分 『第6の容疑者』(六個嫌疑犯) 1965年 / 108分



監督 | 林搏秋 脚本 | 林翼雲(林搏秋) 撮影 | 陳正芳・簡栄添  
出演 | 吳東如、張潘陽、夏琴心、田明

1965年に完成するも出来に不満だった監督がフィルムを封印、90年ようやく初公開された作品。原作は南條範夫による推理小説『第六の容疑者』で、井上梅次監督による同名の日本映画(1960)がある。主人公が住むマンションのセットや軽快なジャズ音楽などが大都会のモダンな雰囲気を出している。☆

## 台湾語映画とは何か

台湾人口の7割以上を話者とする台湾語は、中国福建省の南部で話されている閩南語から派生したものであり、言語学的に中国語方言の一つとみなされる。「台語片」こと台湾語映画とは、1955年から81年にかけて台湾語のセリフだけで製作された映画群をさす。総数1000本を超えたこれらの映画は、伝統人形劇をベースにした歌仔戲映画や現代劇のメロドラマ、コメディやホラーなどのジャンル映画が多く、幅広い年齢層を魅了してきた。

その後も台湾語を部分的に使ったものとしてはニューウェイブ作品や古い台湾語映画のリメイクなどがあつたが、大量生産の時代に庶民に愛されていたこの1000本あまりの映画群とは区別して考えられている。

台湾語映画の製作に関わったのは本省人(台湾出身)の監督と民営企業だけでなく、外省人(中国大陸出身)の監督と公営の映画組織も参入した。台湾映画・メディア文化センターによる収集・修復作業が1990年代初頭から始まり、現存するフィルムは200余り。近年では主要作品が次々とデジタル化されている。☆



## 台湾映画・メディア文化センター

映像・メディア資産の収蔵を職責とする台湾唯一の行政法人機構。映像・メディア資産の収蔵、修復、研究及び普及を促進し、資産の公共化の任務を目的として保存を通して記憶と歴史を未来につなげる。1978年設立の中華民国映画事業発展基金会附属映画図書館を基礎とし、1989年には財団法人映画図書館、2014年には財団法人国家映画センターと称す。現在、国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)、東南アジア太平洋地域視聴覚アーカイブ連合(SEAPAVAA)、国際テレビアーカイブ連盟(FIAT/IFTA)等国際組織の正会員。



## 林搏秋(りん・はくしゅう Lin Tuan-Chiu)

1920年新竹生まれ、42年に日本大学政治経済科を卒業後、ムーランルージュ新宿座と東宝で働く。43年に台湾に戻り新演劇運動を推進したが、47年の「二・二八事件」以降、家業である鉱山業に専念する。57年に台湾語映画のブームに乗って玉峯影業会社を設立。当時の公営映画製作所よりも大規模なスタジオを擁し、宝塚をモデルにしたという俳優育成学校も併設。映画製作に関わった時期が短く作品数も少ないが、採算を度外視した完成度の高い作品が多い。玉峯の俳優育成学校からは台湾語映画のみならず北京語映画界でも活躍する俳優が輩出した。98年没。☆



## 辛奇(しん・き Hsin Chi)

1924年台北生まれ、42年から44年まで日本大学で演劇を学ぶ。台湾に戻り演劇の現場で活躍していたが、56年に映画脚本を担当したことが契機となり台湾語映画の製作に関わるようになる。最盛期の台湾語映画を40数本も監督したほか、北京語映画(66年～)やテレビ・ドラマ(71年～)の製作など幅広い分野で長年活躍した監督である。97年に「台語影人聯誼会」(現在の「台湾影人協会」)の設立に奔走し、初代会長をつとめた。2000年に金馬奨終身成就特別賞を受賞。2010年没。☆

## 記念上映と国際シンポジウム

2021年10月2日[土] アテネ・フランセ文化センター(東京都千代田区神田駿河台2-11)

●14時00分～15時30分 記念上映『チマキ売り』 ※日本語字幕付き

●15時45分～17時15分(予定) 国際シンポジウム「よみがえる台湾語映画の世界」

[ビデオメッセージ]

謝 長廷(台北駐日経済文化代表処 代表)  
王 君琦(台湾映画・メディア文化センター 執行長)  
岡島 尚志(国立映画アーカイブ 館長)

[シンポジウム]

張 昌彦(映画史研究者) ※台湾からリモート出演  
四方田 犬彦(映画誌・比較文学研究者)  
三澤 真美恵(日本大学教授 / 台湾映画史研究)  
石坂 健治(日本映像学会アジア映画研究会 代表)



『チマキ売り』(焼肉粽) 1969年 / 89分

監督 | 辛奇 脚本 | 辛金傳(辛奇) 撮影 | 廖慶松  
出演 | 陽明、金玫、金塗、戴佩珊

1949年に発表された人気の流行歌が映画のタイトルになり、映画の中でも父と娘が雨の夜にチマキを売り歩くシーンで挿入歌として使われている。ファミリー・メロドラマで涙を誘う場面が多いがコメディの要素もあり、冒頭におけるノワール的な場面に辛奇監督の力量がうかがえる。2019年に現代版リメイクも作られている。☆

10月15日[金]

10月16日[土]

10月17日[日]